

保育職従事者の本来感と勇気としての共同体感覚との関連

A study of Relationship between Childcare Teacher's and Kindergarten
Teacher's Sense of Authenticity and Social Interest as courage

折 笠 国 康*

Kuniyasu Orikasa

The purpose of the present study were to develop a scale to measure Social-Interest as Courage, and to examine related factors. The questionnaire was completed by 512 childcare teacher's and kindergarten teachers. A factor analysis yielded 3 factors: self-acceptance, feeling of trust in society, and feeling of contribution. The construct validity of the scale was examined in terms of relations between the scale and the participants' scores, Sense of Authenticity, self-esteem, and resilience.

I 問題と目的

昨今の保育士や幼稚園教諭(以下、保育職従事者)を取り巻く実情として、磯野・鈴木・山崎¹⁾は、保育職従事者のメンタルヘルスの不良を示唆している。また、板内²⁾が示唆するように、少子化政策に伴う延長保育や休日保育、子育て支援の多様な保育ニーズへの対応等が挙げられ保育職従事者のストレスフルな状況が示されている。保育の現場では、特段の専門的な知識や理論を習得する間もなく、特別支援教育や保護者対応に追われることも現場での負担となることが予想される。このような社会的な背景の中で、保育職従事者の業務の多様化や労働環境にかかわる諸問題から離職やメンタルヘルスの低下がもたらされ、それにとまなう保育の質の低下も危惧されている。以上のような保育職従事者を取り巻く状況を鑑み、上村³⁾は、ストレス耐性力や精神的回復力とも言われるレジリエンス(resilience)に着目し、メンタルヘルスが良好な保育士はレジリエンスが高いことを明らかにした。また、保育士のメンタルヘルスを良好に維持するための方策として、ソーシャルサポートの充実、自己効力感を高めること、社会性を高めることの有効性を示唆した。

保育職従事者の最も重要な職責は、子どもの発達に応じた望ましい心身の成長を促すこと、将来の予測が困難で変化が激しいこれからの時代に立ち向かい、自分らしく生き抜ける子ども

* 幼児教育学科

を保育することである。すなわち、困難を克服する活力、リスクを引き受ける能力、協力できる能力として言い表されるAdlerの個人心理学(アドラー心理学)の子どもの教育における中心的理論概念である勇気(courage)、高坂⁴⁾よりAdlerの個人心理学の中心的理論概念の1つであり社会適応や精神的健康との関連が指摘されている共同体感覚(Social Interest)を育成することが保育の大切な役割であることが考えられる。Adlerの個人心理学の理論や考え方についてChew⁵⁾は、様々な心理療法(論理療法、交流分析、クライエント中心療法)や学校教育や子育てに影響を与え、人々の社会適応や精神的健康に対する貢献の可能性を示唆した。また、岩井⁶⁾は、保育職従事者のメンタルヘルスを含めた精神的な健康を支えるものとして、生きることにも最も活力を与える自己勇気づけ(self-encouragement)が欠かせないものであることを示唆した。これらAdlerの個人心理学の理念や概念は、磯野ら¹⁾や上村³⁾が示唆した保育士のメンタルヘルスを良好に維持するための方策を補完するものであると考えられる。岸見⁷⁾は、Adlerの個人心理学(以下、個人心理学)で言うところの勇気(courage)は、共同体感覚の一面であり、共同体感覚を表明する能力であり、自分自身が勇気がある人からしか学ぶことはできないとし、自分がまず勇気を持つことが、他者が勇気を持てるように援助するために必要な出発点であることを示唆した。すなわち、子どもの共同体感覚や勇気を育むためには、その前提条件として保育者自身の共同体感覚や勇気が必要であることを意味し、さらに、共同体感覚を持つことが勇気を持つことの1つの形態であると考えられる。これ等のことを鑑み、メンタルヘルスを含めた精神的な健康を支える保育職従事者にかかわる個人心理学で言うところの共同体感覚や勇気に対する新たな示唆や研究は、保育職従事者の精神的健康や離職問題の解決のみならず、時代に適合した子どもの心身の成長を可能にするよりよい保育を追求する上でも重要な視点となることが考えられる。

岸見⁸⁾は、個人心理学の中心概念の1つである共同体感覚(Social Interest)が勇気(courage)と密接な関連を持ち、共同体感覚を持つためには、自己受容、他者信頼、他者貢献を持つことが重要であり、本当の自由な生き方を実現させることが必要であることを示唆している。共同体感覚(Social Interest)について高坂⁹⁾は、所属感・信頼感、自己受容、貢献感の3因子を下位概念とする共同体感覚尺度を作成し妥当性と信頼性を検討している。また、勇気に関して岩井⁶⁾は、本来一般的に言う勇気のない人がさも勇気がありそうに振る舞う蛮勇ではなく、リスクを引き受ける能力(risk-taking ability)であり、近い表現として自己受容を取り上げている。自己受容とは、自分を肯定的に味方につける能力・態度であると定義し、自尊感情とはほとんど同じ意味であることを示唆した。ここで言う自尊感情とは、Rosenberg¹⁰⁾が示した自尊感情の2つの意味のうち、自分を他者との比較や社会的な比較を基準とした、主に優越性(superiority)や完全性(perfection)と関連した「非常に良い(very good)」と感じる概念とは異なり、むしろ比較の対象を外的な基準に求めず自己内の価値基準に基づき、主に自己受容(self-acceptance)

や自己尊重 (self-respect) と関連した「これでよい (good enough)」とを感じるものである。しかしながら、先行研究で取り扱われているRosenberg¹⁰⁾の自尊感情尺度はこれらの弁別ができていないとの報告もあり、優越性 (superiority) や完全性 (perfection) と関連した「非常に良い (very good)」とを感じる概念の混在の可能性があるため、心理学的な研究で自尊感情を取り扱う際には注意が必要である。

これ等のことを踏まえ、本研究では勇気の定義を「困難を克服する活力があり、リスクを引き受ける能力、協力できる能力があること」とし、下位概念を共同体感覚とほぼ同様に自己受容、他者信頼、他者貢献と想定した。また、昨今の心理学的研究において適応や精神的健康の指標として取り扱われている本来感 (Sense of Authenticity)、Rosenberg¹⁰⁾の自尊感情、レジリエンスとの関連を検討する。本来感とは伊藤・小玉¹¹⁾により「自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度」と定義され、大学生を対象とした調査により、心理的well-beingに正の影響を及ぼすことが明らかにされている自己概念の1つである。本来感の中核的な自己によって自身が機能している感覚から得られる最良の自尊感情 (optimal self-esteem; Kernis,¹²⁾) と概念的には近似であると考えられる (伊藤・小玉¹¹⁾)。また、折笠・庄司^{13) 14)}等、最近の心理学的研究において精神的健康や適応の指標として利用されている自己概念でもある。折笠・庄司¹⁵⁾は、今後の本来感研究の進展と知見の蓄積の必要性を示している。本邦において、現在に至るまで勇気や共同体感覚と本来感などの自己概念との関連を示唆する研究は少なく、本研究は、保育職従事者の適応や精神的健康、子どもにとっての望ましい保育にかかわる知見が得られるだけでなく、Adlerの個人心理学の実証的な検討に寄与することが考えられる。

以上のことから、本研究では保育職従事者の勇気を共同体感覚として測定し、昨今の心理学的な研究において適応や精神的な健康の指標として用いられる本来感 (Sense of Authenticity)、自尊感情、レジリエンスとの関連を検討することを目的とする。

II 方法

1. 調査対象者

東北地方X県の私立の保育園と幼稚園 (含こども園) と公立の保育園と幼稚園 (含こども園) に従事する保育士、保育教諭、幼稚園教諭を対象に回答を求めた。欠損値があるものなど、回答に不備があるものを削除し、合計512名の回答を分析の対象とした。

2. 調査内容

(1) 本来感尺度

伊藤・小玉¹¹⁾により作成された尺度「個人が自分らしくあると感じている全般的な感覚を測

定する尺度」7項目について5件法で回答を求めた。質問項目は「いつも自分らしくいられる」「人前でもありのままの自分を出せる」などである。尺度の得点は7点～35点であった。

(2) 自尊感情尺度

Rosenberg¹⁰⁾により作成された「自己に対して肯定的、あるいは否定的な態度」と定義された自尊感情についての10項目からなる尺度を、山本・松井・山成¹⁶⁾が邦訳したものをを用いた。質問項目は「少なくとも人並みには、価値ある人間である」「物事を人並みには、うまくやれる」など5件法で回答を求めた。尺度得点の範囲は10点～50点であった。

(3) 共同体感覚(勇気)尺度

高坂⁹⁾により作成された「共同体感覚を測定する尺度」の3つの下位尺度「所属感・信頼感」「自己受容」「貢献感」について、勇気概念を意識して不要と思われる項目を削除した。具体的には「所属感・信頼感」から4項目、「貢献感」から4項目の計8項目を削除した。採用した質問項目は14項目で「自分自身に納得しています」「私は進んで人の役に立つことができます」「私は今いるグループや集団の人たちを信頼することができます」などであり、5件法で回答を求めた。

(4) レジリエンス(精神的回復力)尺度

小塩・中谷・金子・長峰¹⁷⁾により作成された尺度「精神的回復力を測定する尺度」12項目について5件法で回答を求めた。質問項目は「私は物事に対する興味や関心が強いです」「私は慣れないことをするのが好きではありません」などである。尺度の得点は12点～60点であった。

3. 調査実施手続き

回答はすべて無記名で行われ、個人が特定できないように年齢や勤続年数についても回答は任意とした。また、質問への回答は自由意志であること、調査の趣旨を各園の所属長を通じて説明を行った。

4. 調査実施期間

2019年の7月から8月にかけて実施した。

5. 分析ソフトウェア

本研究の分析は、IBM SPSS PASW STATISTICS 18を利用した。

Ⅲ 結果

1. 共同体感覚(勇気)尺度の因子分析結果

逆転項目の処理を行った後、下位項目それぞれの平均および標準偏差を算出し、平均±1SDの値を確認したところ理論上限を超えた項目はなかった。

共同体感覚(勇気)14項目については最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。共通性が低い項目、因子負荷量が低い項目、複数の因子に負荷がまたがる項目の有無を確認し、14項目で最尤法、プロマックス回転による因子分析を行ったところ、因子の解釈可能性から、3因子構造が妥当であると判断した(Table 1)。その結果、ほぼ先行研究と同様の因子構造が確認されたため、下位尺度名は先行研究に倣い第1因子を「自己受容」、第2因子を「他者信頼」、第3因子を「他者貢献」とした。各因子の信頼性(クロンバックの α 係数)を検討したところ、「自己受容」は $\alpha = .87$ 、「他者信頼」は $\alpha = .83$ 、「他者貢献」は $\alpha = .81$ となり十分な内的整合性のあることが確認された。3因子での説明できる分散の割合の総和は66.06%であった。

Table 1 共同体感覚(勇気)尺度の因子分析結果

	I	II	III
第I因子 自己受容			
自分自身に納得しています	.84	.01	-.07
欠点を含めて自分のことが好きです	.82	-.01	-.05
自分でも自分自身を認めることができます	.81	-.30	.08
今の自分に満足しています	.8	-.30	-.14
今の自分を大切にしています	.47	.19	.15
自分には何か誇れる事があります	.46	-.01	.27
第II因子 他者信頼			
私は自分から進んでグループや集団に入ることができます	.03	.83	-.05
私は今いるグループや集団の人たちを信頼することができます	-.13	.80	-.03
私は自分から進んで人との信頼関係を作ることができます	.05	.74	.06
私は自分が今いるグループや集団の一員であることを実感しています	-.02	.70	.09
私は全体的に他人を信じることができます	.10	.60	-.07
第III因子 他者貢献			
私は困っている人に対して積極的に手助けすることができます	-.10	-.10	1.00
私は誰に対しても思いやりをもって接することができます	-.09	.17	.66
私は進んで人の役に立っています	.22	-.01	.61
因子間相関	I	.50	.51
	II		.57

2. 各尺度の2変量相関

本来感、自己受容、他者信頼、他者貢献、自尊感情、レジリエンスについて、それぞれ逆転項目に対する処理を施した後に、各下位尺度に含まれていた項目の平均を算出し、各尺度得点とした。それぞれの基本統計量と相関を算出した (Table 2)。

その結果、本来感と他の尺度との関連については、自己受容 ($r=.61, p<.01$)、他者信頼 ($r=.40, p<.01$)、他者貢献 ($r=.42, p<.01$)、自尊感情 ($r=.57, p<.01$)、レジリエンス ($r=.62, p<.01$) と、それぞれに有意な正の相関が認められた。自己受容と他の尺度との関連については、他者信頼 ($r=.46, p<.01$)、他者貢献 ($r=.47, p<.01$)、自尊感情 ($r=.67, p<.01$)、レジリエンス ($r=.48, p<.01$) と、それぞれに有意な正の相関が認められた。他者信頼と他の尺度との関連については、他者貢献 ($r=.45, p<.01$)、自尊感情 ($r=.49, p<.01$)、レジリエンス ($r=.45, p<.01$) と、それぞれに有意な正の相関が認められた。他者貢献と他の尺度との関連については、自尊感情 ($r=.40, p<.01$)、レジリエンス ($r=.44, p<.01$) と、それぞれに有意な正の相関が認められた。自尊感情と他の尺度との関連については、レジリエンス ($r=.52, p<.01$) と、有意な正の相関が認められた。

Table 2 各尺度の基本統計量及び相関係数

	M	SD	相関係数				
			II	III	IV	V	VI
I 本来感	3.25	.63	.61**	.40**	.42**	.57**	.62**
II 自己受容	3.31	.69		.46**	.47**	.67**	.48**
III 他者信頼	3.57	.63			.45**	.49**	.45**
IV 他者貢献	3.81	.61				.40**	.44**
V 自尊感情	3.34	.55					.52**
VI レジリエンス	3.33	.50					

** $p < .01$

IV 考察

本研究の目的は保育職従事者のAdlerの個人心理学(アドラー心理学)の勇気(courage)、または共同体感覚(Social Interest)の因子構造を検証し、本来感(Sense of Authenticity)、自尊感情、レジリエンス(精神的回復力)との関連を検討することであった。

探索的因子分析の結果、保育職従事者の共同体感覚(勇気)は、自己受容、他者信頼、他者貢献の3因子が抽出された。 α 係数の値も高く十分な信頼性があることが示された。抽出され

た3因子間の相関も中程度の正の相関を示していることから、共同体感覚(勇気)の各側面は相互に関連しあっている可能性が示された。本研究より示された結果、すなわち、東北地方X県の保育職従事者の共同体感覚(勇気)については、高坂⁴⁾の示した結果や野田¹⁸⁾が共同体感覚の4側面として示した所属感、信頼感、貢献感、自己受容の示唆を補完するものであると考えることができる。また、本研究の結果は、野田¹⁸⁾が共同体感覚の定義は困難であることを示すように、これまで示されることが少なかったAdlerの個人心理学の基本概念の実証性を示す一助になり得るものであると考えられる。

本来感(Sense of Authenticity)と共同体感覚(勇気)の3因子(自己受容、他者信頼、他者貢献)、自尊感情、レジリエンスとの相関関係を検討した。その結果、本来感と共同体感覚(勇気)の自己受容、自尊感情、レジリエンスとのやや高めめの正の相関がそれぞれ確認された。これは、本来感が持つ適応的で精神的健康にかかわる側面と自己受容、自尊感情、レジリエンスそれぞれの適応的な側面を考慮すれば妥当な結果であると考えられる。また、折笠・庄司¹⁴⁾において示されている本来感と自己受容の関係性についての補完的な役割を果たす結果であると考えられる。この結果により、本来感の適応的で精神的健康とのかかわりに対する新たな知見が追加されたと考えられる。本来感と他者信頼、他者貢献はそれぞれ中程度の正の相関が示された。本来感はい藤・小玉¹¹⁾等の先行研究において、他者との積極的な関係性にかかわる概念であることが示されていることから、他者にかかわる信頼や貢献との関係性が示された本研究の結果についても妥当なものであると考えられる。

自尊感情と共同体感覚(勇気)の3因子(自己受容、他者信頼、他者貢献)との相関関係を検討した。その結果、自尊感情と共同体感覚(勇気)の自己受容とのやや高めめの正の相関が確認された。これは自尊感情の適応的な側面(本来感的な側面)の影響が考えられる。しかし、Rosenberg¹⁰⁾の自尊感情が優越性の概念として測定されている場合には、折笠・庄司¹⁹⁾が明らかにした本来感と優越感がともに高いことによる適応の良さについての補完的な結果として説明することが可能であると考えられる。中学生を対象とした調査結果ではあるが、折笠・庄司¹⁹⁾によって本来感が高い場合には優越感の高さがより適応的な状態であることが確認されている。これまでの先行研究においては自律性の低下など、優越感の負の側面に焦点が当てられてきたが、本来感が高いという条件の下では、その限りではないといった1つの具体的な状態が示された。岸見⁷⁾は、Adlerの個人心理学的な立場から正しい方向での優越性の追求は、共同体感覚を伴った優越性の追求であることを示しており、本研究の結果は、これに符合するものであると考えることができる。また、自尊感情と他者信頼と他者信頼とのそれぞれの中程度の正の相関が確認された。これについても、自尊感情の適応的な側面によるものであると考えた時には妥当な結果である。

レジリエンスと共同体感覚(勇気)の3因子(自己受容、他者信頼、他者貢献)との相関関係

を検討した。その結果、3因子(自己受容、他者信頼、他者貢献)それぞれと中程度の正の相関が確認された。これは、精神的回復力であるレジリエンスによる適応的な効果と、向後²⁰⁾が指摘する共同体感覚の幸福感へのつながりによって感じ取られる適応との関係から考えれば妥当な結果である。また、これらの本来感、自尊感情、レジリエンスと、共同体感覚(勇気)の3因子(自己受容、他者信頼、他者貢献)との関連性から、共同体感覚(勇気)尺度の併存的妥当性についても確認されたと考えられる。

V 今後の課題

本研究では、保育職従事者の共同体感覚(勇気)の因子構造の確認、本来感、自尊感情、レジリエンスとの関連性について検討を行った。これにより、ストレスフルな状況に身を置く保育職従事者の精神的な健康やwell-beingなどにかかわる新たな知見が得られたと考えられる。また、Adlerの個人心理学についての実証的研究に基づく示唆をすることができたと考えられる。しかしながら、共同体感覚と勇気との明確な弁別には至っておらず、今後は本研究の知見を活かしながら勇気についてのより詳細な検討が必要である。さらに、本研究で用いられたデータは東北地方の1つの県から得られたものであり、全国的な傾向を示すには限界があると考えられる。全国的な規模での調査の必要も課題である。

Adlerの個人心理学はポジティブ心理学との関連も指摘されていることから、Seligman²¹⁾が示唆する幸せの要因の1つであるポジティブ感情との関連性や影響について検討することも今後の課題である。

引用文献

- 1) 磯野登美子・鈴木みゆき・山崎喜比古 2008 保育所で働く保育士のワークモチベーションおよびメンタルヘルスとそれらの関連要因, 小児保健研究, 67, 367-374.
- 2) 板内国光 2007 保育者の現在—専門性と労働環境—, ミネルヴァ書房
- 3) 上村眞生 2011 保育士のレジリエンスとメンタルヘルスの関連に関する研究 —保育士の経験年数による検討—, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 60, 249-257.
- 4) 高坂康雅 2014 小学生版共同体感覚尺度の作成, 心理学研究, 84, 596-604.
- 5) Chew, A. L. 1998 *A primer on Adlerian psychology : Behavior management techniques for young children*. Lake Worth, FL : Humanics. (チュウ, A. L. 岡野守他(訳) (2004). アドラー心理学への招待 金子書房)
- 6) 岩井俊憲 2002 勇気づけの心理学, 金子書房
- 7) 岸見一郎 2014 アドラー・アンソロジー 勇気はいかに回復されるのか, アルテ
- 8) 岸見一郎 1999 アドラー心理学入門, KKベストセラーズ

- 9) 高坂康雅 2011 共同体感覚尺度の作成, 教育心理学研究, 59, 88-99.
- 10) Rosenberg, M. 1965 *Society and adolescent Self Image*. Princeton University Press
- 11) 伊藤正哉・小玉正博 2005 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討, 教育心理学研究, 53, 74-85.
- 12) Kernis, M.H. 2003 *Toward a conceptualization of optimal self-esteem*. Psychological Inquiry, 14, 1-26.
- 13) 折笠国康・庄司一子 2010 中学生の本来感の検討 学級風土による違いとの関連から, 共生教育学研究, 4, 13-22.
- 14) 折笠国康・庄司一子 2012 中学生の本来感が学級適応に与える影響 教育カウンセリング研究, 4, 11-20.
- 15) 折笠国康・庄司一子 2019 中学生の学校ストレスが学校忌避的感情と関係性攻撃に与える影響, 及び, 本来感によるストレス低減効果, 学級経営心理学研究, 8, 17-28.
- 16) 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 17) 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 2002 ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性 —精神的回復力尺度の作成— カウンセリング研究, 35, 57-65.
- 18) 野田俊作 1998 アドラー心理学トーキングセミナー, アニマ2001
- 19) 折笠国康・庄司一子 2019 中学生の本来感と優越感および学校適応感との関連の検討: 本来感と随伴性自尊感情の組み合わせの視点から, 発達心理学研究, 30, 132-141.
- 20) 向後千春 2014 アドラー “実践” 講義 幸せに生きる, 技術評論社
- 21) Seligman, M. 2011 *Flourish: A visionary new understanding of happiness and well-being*. New York: Atria. (宇野カオリ(監訳) 2014 ポジティブ心理学の挑戦 —“幸福”から“持続的幸福へ”— ディスカバー・トゥエンティワン)

